

66年コーホートのライフコース-コーホート効果と機会の大小-

Life course of the 1966 cohort (born in Hinoeuma) in Japan
-Consider from cohort effects and social opportunities-

湊 麻紀子(神戸大学・院)

Makiko Minato(Kobe University Graduate School)

本研究はひのえうま迷信で出生数が激減した1966年コーホートのライフコースを追跡したものである。先行研究(大谷憲司1991)により66年を避けるために65年と67年に出産タイミングをずらしたことが大きな理由であることが判明している。出生数激減という点のみ見ると66年は単年の現象であるが、その影響は前年と後年にまで及んだ3年にわたるものであったのである。よって65~67年の3年を一つのクラスタととらえ、高等教育進学・就職・結婚・出産というライフイベントをコーホートサイズと社会的要因という観点から比較検討を行った。

進学に関しては出生コーホートと学年コーホートは3カ月のずれが生じ、66年学年コーホートは出生コーホートより差が小さくなる=コーホート効果は薄れる。そして新聞記事より国公立と私立の受験傾向、全国大学一覧より定員数、学校基本調査より男女別進学率と現役進学率からコーホート別に検討を行った。

66年学年コーホートに関してはコーホートサイズに応じた定員減はなく、更に学習指導要領改訂の一年目であり受験制度という社会的要因での有利があった。現役受験の歳(85年)の進学率は少々高くなっているが、現役進学率が目立って高くなったわけではないため、現役に有利な状況であったがそれ以上に過年度卒業者に有利に働いたと考えられる。そして各コーホートの約6割は進学せずに就職したのである。

就職に関しては1年単位での検討が難しいため、労働力調査基本集計と一般職業紹介状況を使用し、初職を迎えるであろう84~93年の社会状況からの検討を行った。高卒・短大卒・四年制大学卒のいずれの時点においても比較的景気と求職状況が良かった時期であり、大きな苦戦はなかったと考えられる。ただし、バブル景気崩壊後の93年以降の就職となった場合は非常に厳しい状況となったであろう。

結婚と出生に関しては人口動態統計を使用し全数から検討を行った。結婚に関しては66年コーホートの結婚率が高く、その理由は66年コーホートサイズの小ささから発生する結婚スクイズによるものであった。反面、サイズが大きい67年コーホートの結婚は66年コーホートと対照的なものとなり結婚率は低くなった。更に66年コーホートは同世代同士の結婚率が非常に高くなっていた。結婚率が高かった66年コーホートは出生率もまた高くなった。対照的に67年コーホートは出生率が低くなっている。

66年コーホートのライフコースは他のコーホートよりコーホート効果と社会的要因の両面において有利であったと考えられる。ただ、元々のコーホートサイズが小さく数としては少ないため、その有利さは見えにくくなっている。特に結婚と出産に関しては結婚(出産)の率は高くとも結婚(出産)の数は多くなっていない。